# 第 101 回　ロシアの発展①

## 1　ロシアの発展

・13～15 世紀にかけてロシア人は、モンゴル人の（　　）の支配下にあった。
→ロシア人が建国した（　　）は、その属国であった。
→1380 年、キプチャク=ハン国を破ってほぼ自立した。

イヴァン3世
モスクワ大公国の領土を拡大させた。
「ツァーリ」は「カエサル」に由来する。

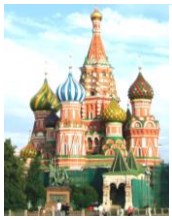
☆モスクワ大公国（1325 年ころ～16 世紀）
都…（　　）　　※現在は（　　）の首都
◆（　　）（在位 1462～1505 年）
・1480 年、キプチャク=ハン国から完全に独立し、モンゴルの支配から脱した。
・滅亡したビザンツ帝国の皇女ソフィアと結婚していたことから、ロシア語で「皇帝」を意味する（　　）を自称し始めた。
・正教会の中心はロシア正教会となり、モスクワは「第 3 のローマ」と呼ばれた。

イヴァン4世
ツァーリによる専制体制を、ツァーリズムという。

◆（　　）（イヴァン雷帝）（在位 1533～1584 年）
・ツァーリの称号を正式に使用し、貴族をおさえて中央集権体制を確立した。
・ヴォルガ川流域のカザン=ハン国やアストラハン=ハン国を征服した。
・（　　）の首長（　　）に、シベリア遠征を行わせた。
・しかし晩年には恐怖政治を行うようになり、国力は疲弊していった。
　→イヴァン 4 世の死後、モスクワ大公国は内乱状態となり消滅した。

ソ連の名匠エイゼンシュテインが監督した。イヴァン4世を1部では英雄、2部では孤独な独裁者として描いた。モデルはスターリンらしい。
映画『イワン雷帝』

イヴァン4世は、いさかいから息子イヴァンを殴り殺してしまった。正気に戻ったイヴァン4世が、茫然とした表情で息子を抱きしめている。
レーピン作「イヴァン雷帝と皇子イヴァン」


モスクワの赤の広場に立つ聖堂。イヴァン4世が建立した。
現在はレーニン廟がとなりに立っている。
聖ヴァーシリー聖堂

## 2　ロシア帝国の成立

・モスクワ大公国の崩壊後、ロシアでは内乱が続き混乱状態となった。
→1613 年、大貴族の（　　）がツァーリ（皇帝）に選ばれた。

ミハイル=ロマノフ
300 年続くロマノフ朝の創始者ではある。

☆（　　）（1613～1917 年）
都…モスクワ→ペテルブルク
◆ミハイル=ロマノフ（在位 1613～1645 年）
・内乱をおさめ、ロマノフ朝を創設した。

・1670 年、コサックや農民が、（　　）を起こした。

ピョートル1世
その功績から、ピョートル大帝とも呼ばれる。最後は、部下を助けようと冬の海に飛び込み、それがもとで肺炎となって死去した。

◆（　　）（大帝）（在位 1682～1725 年）

・ピョートル１世は自らオランダやイギリスを視察し、積極的に西欧の科学技術を取り入れてロシアの近代化につとめた。

・ピョートル１世はロシアの発展のため、冬でも凍らない（　　）を求めて領土の拡大を目指した。

→不凍港を求めることは、ロシアの基本的な外交政策となった。

・1696 年、オスマン帝国から黒海北東部の（　　）を獲得した。

・1700 年、（　　）のカール 12 世との間に（　　）が始まり、当初はスウェーデンが優勢だったが徐々にロシアが反攻した。

→北方戦争中に（　　）を建設し、新しいロシアの都とした。

※バルト海沿いのネヴァ川の河口にあり、「西欧への窓」と称された。

→1721 年、ニスタット条約で（　　）沿岸を獲得した。

＜ロシアの東方進出＞

・オホーツク海方面に進出したロシアは、中国の清と衝突した。

→1689 年、清の康熙帝と（　　）を結んだ。

※アルグン川とスタノヴォイ山脈（外興安嶺）を国境とした。

※大帝死後の 1727 年には、清の雍正帝と（　　）を結んでモンゴル方面の国境を定めた。

清の康熙帝
ピョートル１世と同時代ということを覚えよう！

・デンマーク人の（　　）にカムチャッカの探検を行わせた。

→海峡を超えて（　　）や千島に到達し、18 世紀にロシア領とした。

ロシアの伝統的な長いあごひげは、遅れたものとみなされた。
従わない者には、ひげ税がかけられた。

ひげ税

最後は戦死したが、真相は暗殺らしい。
かなり優秀な王であったが、政治家というより軍人タイプであった。

スウェーデン王カール 12 世

ベーリング海、ベーリング海峡などに名前が残っている。
最後は無人島で病死し、現在もそこに墓がある。

探検家ベーリング